

## 「ペンとシェイク」

第 12 期 中野 和敬

客観的に見て小生が西高に入るほんの少し前あたりが日本卓球界の黄金時代の頂点であった。あの偉大な故 荻村 伊智朗 先輩をはじめとして世界チャンピオンがきら星のごとく居並んでいた。そうした事情もあり、東京都内のどの中学でも卓球部は盛況であったように思われる。小生もご多分にもれず、中学生になると同時に卓球部に入ってみた。ところが、小生が入った中学では、部員は何十人もいるのに、卓球台は規格よりやや薄い板でできている代物がたった一台あるだけであったから、一年生はめったに球が打てなかった。そんな訳で、一年生はどんどんやめていったけれども、辛抱強く練習に侍ったおかげで日曜日にはなんとか時々球を打たしてもらった。その時すでに、ラケットの握り方にはペンホルダーとシェイクハンドのふたとおりがあると伝え聞いていたが、後者の方が合理的なように思われ、先輩にシェイクハンドでやりたいと申し出たところ、シェイクハンドで打つ指導者がいないからそれはだめと言われた。そこで仕方なく、皆に従いがい、ペンホルダーを使い始めた。

その頃の日本代表選手は、全員ペンホルダーで球を打っていた。今日ではやや奇異にも感じられるペンホルダーでカット主戦の日本代表選手まで女子にはいた。小生は実際に 1956 年東京開催の世界選手権戦でその戦いぶりを目にしている。当時の欧米選手で名をなしたのはバークマンとリーチを代表としてシェイクハンドのカットマンばかりであった。このふたりがはじめて試合をしに来日した際、誰もふたりには勝てなかったと伝え聞いている。そうした世界の潮流を打ち破ったのがペンホルダー攻撃型戦法を主力とした日本選手団であった。

西高の卓球部でも先輩方は大半がペンホルダーであった。ただ、何人かはシェイクハンドを使っていたけれども、当時の世界の常識どおりやはりカット主戦であった。小生自身は今更という気持ちで、中学時代同様、ペンホルダーで練習を続けていたが、シェイクでの攻撃型戦法の方がよいのではないかと考え、そのような少数意見を友達にも口にしていった。けれども、その反応は大方否定的であった。

その頃から 60 年近く経った現今では、周知のように、世界選手権大会でペンホルダーを使っている選手は極くわずかで、日本選手もみなシェイクハンドで球を打っている。小生自身が卓球を熱心に練習したのは、一年生の冬休みまでで、その後はすっかりと言ってよい程やめてしまった。その理由は、ペンかシェイクかに悩んだのでは決してなく、絵を描く方に熱意が移ったという事情はあったものの、結局は小生自身の卓球の技量が思うようには上達しなかったからに過ぎない。